

ディケンズ批評 古典時代

ジョージ・ギッシング

On George Gissing

小池 滋

Shigeru KOIKE

ジョージ・ギッシング（1857-1903）がディケンズを論じた文章の主なものとしては、1898年に出版した『チャールズ・ディケンズ論』（*Charles Dickens: A Critical Study*）と、死後にアメリカでは1924年、イギリスでは1925年に出たディケンズ作品序文集がある。

後者は、前者が出版された1898年に、ロンドンの出版社チャップマン・アンド・ホールが新しく企画した『ロチェスター版ディケンズ全集』のための序文として依頼されて書いたものであるが、この全集が財政難から途中で挫折してしまったため、ギッシングの序文は1898-1901年に全部で12篇書かれたといわれているが、今日見ることができるのは9編 『ボズのスケッチ集』『ピクウィック』『オリヴァー』『ニクルビー』『チャズルウィット』『ドンビー』『バーナビー』『骨董屋』『荒涼館』 だけである。これに、1901年12月21日号の雑誌『文学』に初出の「ディケンズの思い出」を加えて、一冊の本となった。アメリカでは『チャールズ・ディケンズ作品研究』（*Critical Studies of the Works of Charles Dickens*）、イギリスでは『不滅のディケンズ』（*The Immortal Dickens*）の表題がつけられた。

というわけで、序文集の方は重要なディケンズ後期作品についてのものを欠いているので、ディケンズ文学全体像についてのギッシングの完全な評価とは呼べまい。だから、ここでは、もっぱら1898年出版の『ディケンズ論』を資料として、わたしの意見を述べたいと思う。

なぜギッシングなのか？

ギッシングの『ディケンズ論』は、ディケンズの（評伝ではなく）文学全体をいくつかのテーマに分けて論じた、もっとも早いもののひとつとして認められ

ているが、必ずしもベストとは評価されていない。ディケンズ批評史上画期的な道標のひとつとは認められていないようだ。わたしがかつて金山亮太氏と共同でこの本の邦訳を世に問うた時、「なぜ、いまさらこんな本を？」という疑問の声があったのを記憶している。独創的・革命的な見解などはない、わかりきった、生ぬるい常識的な意見が示されているだけの本を、なぜいまさら取り上げたのだ？

20世紀に入ってすぐに世に出たチェスタトンのディケンズ論に比べると確かにパンチ不足。読者をアッとさせるような表現はないし、チェスタトンによってギッシングがしばしば批判され、からかわれているのも事実である。読後の印象を比べてみると、ギッシングは影が薄い。

だが、出されてから100年以上も経った今から冷静にふり返ってみると、ディケンズについての今では「常識的」と言われていることで、ギッシングによって初めて指摘されたことが、かなり多いのではあるまいか、と思えて来る。彼の『ディケンズ論』のおかげで、今日の常識が通用し、誰もが自明のことと考えるようになったのではあるまいか。

以下、その具体的な実例をいくつか拾ってみよう。

「常識」の実例

今日ディケンズを文学としてまともに読もうという人は、『リトル・ドリット』を退屈だ、うんざりだとは言わないのが常識となっているが、ギッシングが作家活動をやっていた頃は、それは常識ではなかった。ディケンズが死んだ1870年6月に、『サタディ・レヴュー』に載った弔辞には、次のような一節があった。

『リトル・ドリット』のみを別とすれば、彼の数多い作品で、彼の疑うべからざる天才と手腕が現れ出ていない作品はひとつもない。

これがディケンズ死後の一般的評価であった。だからギッシングがこの作品を積極的に評価したのを見て、人びとはこれを非難・嘲笑の種にした。ギッシング自身が人生における負け犬、ペシミストで、環境が人間の性格を破壊・汚染するという奇天烈な理論の例外的実例であることを自ら証明しているにすぎないと。この小説の中にある、普通のディケンズ崇拜者を当然不快にさせるものこそが、当然ギッシングのような人間を嬉しがらせるのだろう。というチェスタトンの言葉（エヴリマン文庫版への序文）は、こうした平均的意見を反映したのであって、決してチェスタトンの逆説でもハツタリでもない。

だが、ウィリアム・ドリットこそがディケンズのユーモアの人物造形における最高の実例というギッシングの評言（第5章参照）は、いまでは常識として受け容れられている。その論拠として、マーシャルシー監獄の父がナンディーを歓迎

(?)する場面を選ぶのも、ごく当然のことと多くの人が認めるだろう。

ディケンズが19世紀イギリス中産階級を痛烈に諷刺しているのは間違いないが、彼は労働者階級の典型でも代表でもないから、労働者階級を代表させるすぐれた作中人物を創造することができなかった。これもジョージ・オーウェルのディケンズ論以後、わたしたちが常識として疑わずに受け容れている考え方であるが、実はこれもギッシングが第10章「ラディカル」の中で既に鋭く指摘していたことであつた。ディケンズはイングランド北部工業地帯の労働者の(ましてや資本家の)実体など知ってはいなかったのだ、と。

ディケンズを19世紀のヨーロッパ大陸の小説の巨匠たち、例えばバルザックやドストエフスキーなどと比較するのは、いまでは常識を通り越して陳腐にすらなっているが、これもギッシングが第11章「比較」で試みていることだった。もちろん、後世のアカデミックな研究者が行っているような、体系的・実証的な比較文学研究ではない。いまから見ると恣意的・実感的と評されても仕方あるまいが、鋭い洞察があることは、いまでも納得できる。ギッシングがブルーストヤカフカの文学を読むことができなかったのは残念だと、21世紀に生きるわたしたちは思ってしまう。もし読んでいたなら、わたしたちによりヒントを与えてくれたであろうに、と。

ディケンズはわが同業者

これでギッシングがディケンズを論じた際の姿勢がはっきりして来る。殺し文句を叩きつける教祖的批評家(なんて言うとなチェスタトンから叱られるかな)でもなければ、アカデミックな、批評の対象との間にいつも距離を置く学者でもない。その中間。ディケンズを常に同業者、イギリス小説の同じ流れを汲む作家と見なさざるを得ない位置に自分を置いている。

それはギッシングが小説家としてささやかなデビューを果たした頃からそうだった。1884年、27歳のほとんど無名の青年が、公刊されたものとしては二番目の小説。しかし、処女作の小説はどこかの出版社からも断られたので1880年に自費出版したわけだから、事実上はこれがデビュー作と言ってよい。『無階級の人びと』の第15章の中で、作者の分身のような青年が言う。

日常生活を書いた小説は、もはや陳腐になりかかっている。ぼくたちはもっと深く掘り下げて、これまで誰も触れなかった社会層に手を触れねばならない。ディケンズはこの点を感じてはいたが、目ざす主題に直面する勇氣がなかったのだ。彼の月刊分冊は家庭の茶の間のテーブルに載らねばならなかったのだからね。

これが作者自身の意見と同じであることは、ギッシングが1880年11月3日に

弟にあてて書いた手紙によって裏書きされる。

ぼくが独力で小説への道を切りひらいたのであることは間違いない。もちろん、ぼくの方法や目標は、ディケンズのそれとは比べようもないのだから。

いかにも若い野心にみちた作家のマニフェストらしい威勢のよい発言である。そして彼は前述の小説において、ディケンズが明確に描くことをためらった階層の人びと、例えば貧困ゆえに売春婦となった女をヒロインに据えているから、口先だけのきれいごとではないと証明できる。

だが、ディケンズは後輩の作家が景気よく血祭りに上げて、踏みにじって前進するだけで済ませることができそうな単純凡庸な作家ではなかった。そしてギッシングはこの事実に気づかぬほどの鈍感無能な作家ではなかった。先輩の重箱の隅をつついて大みえを切って得意になっていられるほどの愚かなお人好しでもなかった。何のかのと言っても、結局自分の小説はディケンズの小説に及ばないことを、思い知らされてしまった。

そこにギッシングの苦しみ、辛さがあったのだが、同時に「喜びもあった」と書き加えるべきだろう。ほぼ半世紀前にイギリス文壇に登場した先輩の限界を鋭く指摘しながらも、やはり自分もまた同じ小説伝統に属する同業者であると痛感し、それを誇りと思わざるを得ない。そして、ディケンズの人間として、プロ作家としての誠実さに脱帽しないではいられない。

ギッシングにとってのディケンズは、学者の研究対象でもないし、自分の信仰告白のだしに使うだけの材料でもない。手術台の上に載せてメスを振るう相手でも、ガラス板の上に載せて顕微鏡で観察する試料でもない。ともに仕事をし、ともに創作の喜びと悲しみを分かち合う同僚、仲間であった。

ディケンズを神のように崇拜する人は、このようなことを書くと傲慢不遜、僭越の沙汰だと怒るかもしれない。おのれの身のほどを知つてるのか、と。でも、ギッシングはわたしにディケンズを神のように崇拜するな、同胞として接するようにと警告してくれた。このひとつの理由からだけでも、わたしはギッシングの『ディケンズ論』を、ディケンズ批評史上の重要な道標のひとつと数えたい気がする。